

# AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

医学と生物学 (2001.12) 143巻6号:167~170.

日本語版SDLRSの再テスト法による信頼性の検討

松浦和代、山内まゆみ、野村紀子

11598

## 日本語版 SDLRS の再テスト法による信頼性の検討

松浦 和代 山内まゆみ 野村 紀子

(旭川医科大学医学部臨床看護学講座)

Guglielmino は、自分に必要な学習へと自らを方向付けていく能力やその準備性が高い学習者を a highly self-directed learner と定義している。そして1977年に、自己方向付け学習に対するレディネスを測定する尺度として Self-Directed Learning Readiness Scale (以下 SDLRS) を開発した<sup>1)</sup>。現在、看護基礎教育は精練されたコア・カリキュラムの検討を進めている。これに並行して、学生が自ら課題を探索し問題を解決していく能力を養うために、教育方略の積極的な転換を図る必要があるとされている。われわれは、看護基礎教育目標の評価に SDLRS が有益な視座を与えるのではないかと考え、1998年に著作権者から翻訳許可を得た。

日本語版 SDLRS を作成後、大学生1519名のデータを基に信頼性と妥当性の検討を行った<sup>2)</sup>。その際の信頼性の検討は内的整合性法のみであったため、今回は再テスト法による追加検証を目的とした。

## 方法

対象と手続き：看護系大学1校の助産選択学生と看護専修学校2校の助産婦科学生を対象とした。方法は施設毎に集合法とした。

倫理的配慮として、研究参加は自由意志であり成績評価とは関係がないことを対象者に口頭で説明した。回答は匿名とした。

本尺度のように学習刺激によって変容する能力を測定する場合、再テスト法の施行時期には配慮を要する。今回は、4月のオリエンテーション後から実習開始までの期間を学習刺激が少ない時期と判断した。1回目の調査は平成13年4月に、2回目はその14日後に企画した。

測定用具：日本語版 SDLRS は58項目から構成されている。回答は各項目が自分に「全くあてはまらない」から「いつでもあてはまる」までの5段階評価による。得点範囲は58～290点であり、得点が高いほど自己方向付け学習に対するレディネスが高いと評価される。

分析方法：得点間の相関は Spearman の順位相関係数によった。得点の差の検定には Wilcoxon の符号付順位検定を用いた。統計ソフトは SPSS Ver.10.0J for Windows を使用した。

---

English Title for No. 11598: Reliability of Japanese-SDLRS by Test-Retest Method. Kazuyo Matsuura, Mayumi Yamauchi and Noriko Nomura [Department of Clinical Nursing, Asahikawa Medical College, Asahikawa.] *Medicine and Biology*. 143 (6) : 167-170, December 10, 2001. (著者校正)

結果

1) 対象者の背景

調査に参加同意が得られたものは、看護系大学助産選択学生 11 名、看護専門学校助産婦科学学生 40 名の計 51 名であった。回収率は各調査共 100% で欠損データはなく、全数を分析対象とした。

対象者の平均年齢は 21.96 (SD1.81) 歳であった。臨床経験は「なし」が 43 名 (84.3%), 「あり」が 8 名 (15.7%) で経験年数は 1~5 年であった。

2) 日本語版 SDLRS 得点

1 回目の平均得点は 201.96 (SD21.88) 点, 最小値は 138 点, 最大値は 257 点, 中央値は 199 点であった (表 1)。これを下位尺度別に分析し, 図 1 に示した。

2 回目の平均得点は 203.26 (SD20.80) 点であり, 1 回目と比較して有意の差はなかった。しかし最小値は 168 点, 最大値は 249 点と変化が認められた。中央値は 200 点であった。

2 回目の下位尺度別得点を 1 回目に比較した (表 2)。有意差はなかったが, 「Ⅲ. 学習に対する自己責任の受容」「Ⅳ. 探究心」「Ⅶ. 将来に対する前向きな姿勢」の平均得点はやや低下した。一方, 「Ⅰ. 学習への愛着」「Ⅵ. エネルギーッシュな自己イメージ」の平均得点はわずかながら上昇が認められた。

1 回目と 2 回目の得点間での相関係数は 0.858 であった ( $p < 0.001$ )。

表 1 日本語版 SDLRS の結果 (n=51)

項目	1 回目	2 回目
平均	201.96	203.26
標準偏差	21.88	20.80
最小値	138.00	168.00
最大値	257.00	249.00
中央値	199.00	200.00
四分位偏差	11.63	17.25

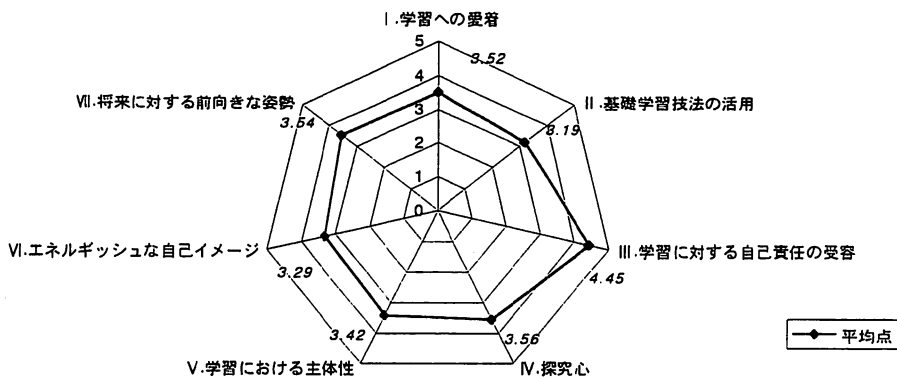


図 1 日本語版 SDLRS-1 回目の得点分析 (n=51)

表2 下位尺度別得点比較 (n=51)

下 位 尺 度	平均得点	
	1 回 目	2 回 目
I. 学習への愛着	3.52	3.58
II. 基礎学習技法の活用	3.19	3.20
III. 学習に対する自己責任の受容	4.45	4.39
IV. 探究心	3.56	3.49
V. 学習における主体性	3.42	3.42
VI. エネルギッシュな自己イメージ	3.29	3.35
VII. 将来に対する前向きな姿勢	3.54	3.36

### 考察

再テスト法の実施に際しては、初回テストによる記憶が再テスト時に及ぼす影響を考慮し、十分な間隔をとる必要があるとされている。今回は14日間をおいての実施であった。結果として、2回の得点間に有意の差はないが、最小値・最大値および各下位尺度の数値には流動性が認められたことから、初回施行による記憶の影響は小さかったと評価した。

日本語版 SDLRS<sup>2)</sup>は、すでに因子分析によって7因子が抽出され構成概念妥当性が確認されている。併存妥当性については一般性セルフ・エフィカシー尺度(坂野, 1986)<sup>3)</sup>を外的基準とした相関係数から検討した ( $r=0.460$ ,  $p<0.01$ )。また信頼性に関しては Cronbach の  $\alpha$  係数が 0.914 であった。

今回、再テスト法によっても 0.8 以上の強い相関があり、日本語版 SDLRS は信頼性の高い尺度であることが再確認された。

さて、大学生の日本語版 SDLRS 平均得点は 187.30 点、看護学を専攻する大学生では 191.33 点である。これに比較して、本対象者の平均得点は 200 点以上の高い値を示している。今後1年間に分娩介助を含めた専門性の高い実習を経て、自己方向付け学習に対するレディネスがどのように変化するかは興味深い点であり、調査を継続中である。

### 結論

日本語版 SDLRS の信頼性を再テスト法によって検討した。対象は助産選択または専攻の学生 51 名であった。平成 13 年 4 月に日本語版 SDLRS を測定用具として 2 回の調査を実施した (回収率 100%)。1 回目の平均得点は 201.96 (SD21.88) 点、2 回目は 203.26 (SD20.80) 点であった。2 回目の得点間の相関係数は 0.858 であり ( $p<0.001$ )、高い信頼性が再テスト法によって確認された。

1) Guglielmino, L. M.: Development of the Self-Directed Learning Readiness Scale. Doctoral Dissertation University of Georgia 1977 —2) 松浦和代: 第3章日本語版SDLRSの信頼性と妥当性の検討, 阿部典子(編): 日本語版SDLRSの開発と看護教育への応用, 平成11・12年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書 2001 12-27 —3) 坂野雄二, 東條光彦: 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み, 行動療法研究 12(1)73-82 1986

(受付: 2001年10月18日)

[通信先 松浦和代: 旭川医科大学医学部臨床看護学講座,  
旭川市緑が丘東2条1丁目1-1 (〒078-8510)]

